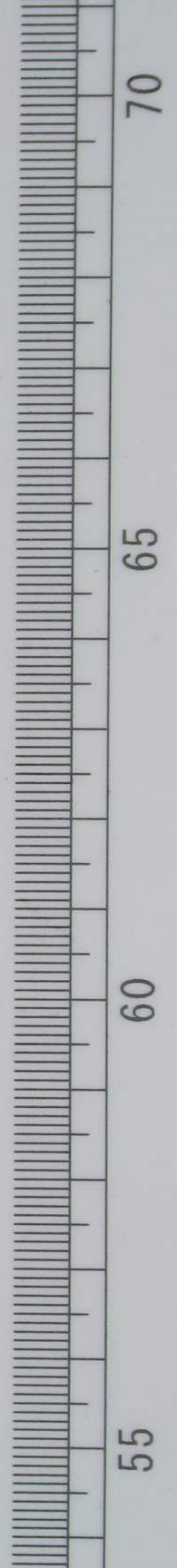


玉圃兩浦鳴

たまほらふらふらふらふら

森林太郎作



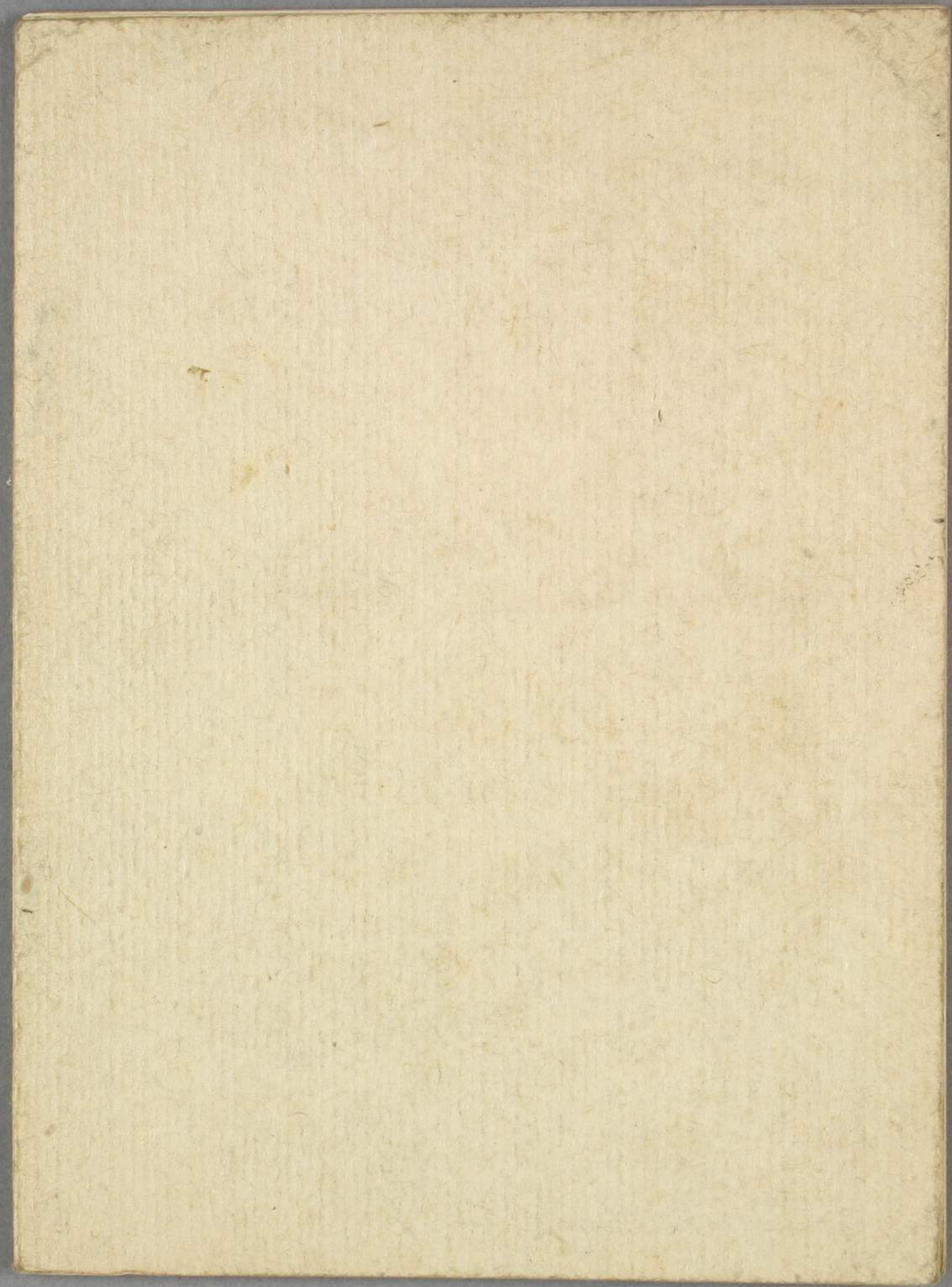
55

60

65

70





玉篋兩浦嶼

上ノ卷

上手高二重に朱欄干。御簾を垂る。中央より少し下手に寄せ井筒。桔槔。その上に桂の木。

第一節

赤女。十五六歳の女ノ童。赤鯛の冠。口女。十歳許の女ノ童。樂器を持つ。鯛の冠。女ノ童大勢。赤女と同じ年頃なるをば赤女率ゐ、口女と同じ年頃なるをば口女率ゐる。皆魚の冠。後、者は種種の樂器を持

つ。

赤女等の群あかめらのむれ。(共に歌ふ。口女等の群くちめらのむれ樂器がくきを弄ぶもてあそ。)

『さすなき玉たまど すみわたる

みづのふかさは いくちひろ。

いろなきものも かさなれば、

あをあをとして そこ見えず。』

『人は知らねど、 そのそこの

雉たかがき 堞ひめがき ととのほり

照りかがやける たかごのに

くしきをとめぞ 住みたまふ。』

(歌ひつつ入る。樂の群も共に入る。御簾を巻く。)

第二節

下手に唐櫃からびつ。錦にしきの覆おほひあり。鏡臺きやうたい櫛くしげ。

浦島太郎うらしまたらう。脇息けふそくに倚りて假寐うたたねす。

乙姫。

口女。

乙姫。 おん目のさめて ひか。

太郎。 おもひもかけぬ 夢ゆめなりしよ。

乙姫。 みけしきすぐれず 見えたまふは、

太郎。

凶きゆめにも 見たまひしか。

よろこびありて なげきなき

ここのみやるに 年を経て

ひさしくわすれし 上國の

くるしきさまを まのあたり。

乙姫。

さてはあの人間の 世のさまを。

太郎。

いかにもわれは 世にありし

むかしのごとく ただひとり

かがみにまがふ うなばらに

小ぶねをうけて こぎいでたり。

鉤をおろせば 釣絲の

わづかにゆらぐ そよかせに

おもてをふかせ こちよく

ときのうつるを 知らずして、

ただ釣るほごに つるほごに、

松魚に鯛に かずしれぬ

獲ものにこころを うばはれて、

かへらんことをも わすれるたり。

かかるをりしも わが舟の

次第につよく 紗ぐに

ふとこころづき おほぞらを  
ふりさけみれば、こはいかに。  
水とそらの さかひより  
車輪のごとき あまぐもの  
まろがりいでて、たちまちに  
そらのなかばを おほはんとす。  
うねりの波の おともせで  
ちかづきよすと おもふまに、  
風たち海わき 雨そそぎ  
いかづちさへに なりいでぬ。

この時のれる わがふねは  
風にもまるる 木葉に似て、  
みなそこ深く かづき入り、  
なみの上たかく のせられつ。  
構をおすわれは いきしにの  
さかひは今と ならひえし  
おす手ひく手の 陰 陽  
てだてをつくすと 見るほごに  
女ノ童らの うたふこゑ  
みみにひびきて 目さめたり。

乙姫。

そはおそろしき おんゆめを

おん身はごらん なされしよな。

くがに獣と たたかふも、

うみに波濤と あらそふも、

そは人間の 命ならん。

あめかせしらぬ このくににて

わらはごともにくらすをば

おん身はうれしと おぼさぬか。

いやとよ。思はぬ 夢といへど、

まことは日ごろ わがむねに

太郎。

つつめることの いつしかに

こりてゆめとや なりぬらん。

渴して水を おもふごと

このとし月の 平和に倦み

いまは 事業の したはしく

なりぬるものか、 おぼつかな。

さらばわらはが 恩愛の

なさをあだに したまひても。

おお。かくいはば つれなことも

なさけなことも おぼさんが、

太郎。

乙姫。



さいつころより なにゆゑか  
をりをりこころ たのじまず、  
事もなきに 氣をいらち、  
女、童らを しかりもし、  
はてはやさしき おん身にさへ  
つらきことばを きかせしを  
さぞあやしまれし ことならん。  
わが身ながらも けふまでは  
そのゆゑさだか ならざりしを、  
いまのゆめにて さとりえたり。

このみやゐの しづけさは  
えだをならさん 風だになく、  
ひでりもせねば あめもふらず、  
いとめでたしとは おもへども、  
たえまなく咲く 湯津桂の  
はなのかをりに 息つきて、  
互てすぬるまぬ ゐのみづに  
ひびにのんごを うるほさんは、  
たひらかなるにも やすきにも  
ほごもこそあれ。 わがむねの

さばかり悶え、もたえしは  
この平和にこそ、よりつらめ。  
さきに風波を、ゆめみしとき、  
身うち、の血汐、沸き返り  
氣も晴晴と、なるほどに、  
ひごろのうたがひ、やぶれしぞ。  
色も香もある、おこ事を乗て、  
このみやゐを、たちさらんは、  
こころぐるしき、かぎりなれど、  
おことは自然、われは人、

おことは物の、おのづから

成るをよろこび、われはまた

ことさらに事を、爲さん、とすれば、

ふたりのこころは、合ひがたし。

ええ。(胸を押ふ。)げにわらはは、つみふかくも

異類のおんみを、なごしたひし。

ひとたびこころを、さりたまはば、

またあふこころも、あるまじと

おもへば、かなじき、このわかれ。

(太郎に絶り泣く。涙まことの玉となりて、はらはらと落つ。)

乙姫。

太郎。(振り離して後向になり目を押ふ。) われもおぼゆる。こひの

答。

乙姫。(俯して玉を見る。) これが涙と。いふものか。

(口女唐櫃の上より錦の覆ひを取り、いざり寄り玉を包む。)

太郎。よしなきちぎりに。鯨人の

なみだをここに。みるあはれさ、

とは云へ男兒の。こころざし、

おもひたちては。すてられず。

すなごりしたりし。そのむかし

わが着しきぬを。いだされよ。

乙姫。

はあい。(口女に。) 口女よ。ここに來よ。

そなたはいにしへ。釣鉤に

のんごをきずつけ。瘡となりし

便なき身ながら。さかして、

赤女とふたり。身ちかく召し

つかふもひさしき。ほごのこと。

いとけなけれど、うきときは

力になりて。たまはるゆる、

赤女をばおね。そなたをいもこと

わが手のやうに。おもふぞや。

そなたもききしか、兄のきみは  
われらをすてて、おそろしき

人間の世に、ゆきたまへば、

のこるわらはは、けふよりは  
たれごともにか、ものいはん。

そなたとおなじ、くちなしの

色なく彩なく、くらすべし。

あのからびつのみけしをこれへ。

(口女唐櫃より衣を出す。)

太郎。(衣を解く。) われもおこごと、さざめごこの

かたれごつきぬ、それならで、

いまよりのちは、口舌を

事業のあだど、おもひつつ

おなじく口をつぐむべし。

乙姫。(衣を受け取り夫の後に立つ。) みぐしのみだれて、ひへば、

いでなでつけて、まるらせん。

赤女はるぬか。

第三節

前の人人。

赤女。

赤女。

(出づ。)

召したまふは。

乙姫。

みぐしだらひを。

赤女。

はいはあい。(入る。)

乙姫。

吾兄のみぐしに さはらんも

けふがなごりに ならんかと

おもへばかなしや。(衣を夫に着す。赤女盥を持ち下手より

出づ。井を汲む。銀の八角の釣瓶より水を盥にうつす。口

女八稜鏡を掛けたる臺を出す。赤女二重に上り盥を進む。)

赤女。

いつにない

このお支度は。

乙姫。

兄のきみは

人間の世へ かへらんとて

このおん支度。

赤女。

(驚く。)

さてもわるい

おぼしたちにて ひよ。

あの人間と いふものは

はがねをきたひて 鉤となし、

いとをむすんで あみとなし、

うをといふうをを とりこにし、

あまつさへその かばねをば

あるは脛なますに きりくだき

あるはかまいり ひあぶりの

むごいしおきに あはすとやら。

わらはも口女くちめも これからは

小海老こいびや蟹かにを あひてにして

いたづらごとは せぬゆゑに、

おもひごごまり たまはれかし。

(此中乙姫髪を撫で付く。)

太郎。(立つ。) 洞天仙境の ゆめさめて、

またひとのよへ。 むらばむらば。

(二重を下る。)

乙姫。(赤女口女と續きて下る。) いまがわかれか。

太郎。(釣瓶等に目を付く。)

とごめおかんは おことのため

やくなきうれへの たねならん。

もとのうらわに たちかへる

身のまもりにも なりぬべし。

あれをはづして

乙姫。

とらせよとか。

きみとはじめて あひみじさき

手にとりましし あのさをは  
のちのちまでの おもひでにと  
このゐにかけしを はづせとか。  
さ、あれをはづしてよ。

赤女。

はいはい。

(口女と釣瓶を上げ置き竿を手繰り下し横木よりはづす。竿  
赤女の手に残る。太郎乙姫井の側に寄る。乙姫井筒に手を  
掛け夫を仰ぎ見る。)

乙姫。

いまさらいふも おろかなれど、  
ここにきましし はじめのころ

あかぬあそびの てすさみに  
あのかつらのきの えだを折り  
髪にかざして もろともに  
このゐにうつす みづかがみ  
たがひにかけを 見くらべて  
ゑみかはししも きのふのやう。  
ゐはかれねども なさけの泉  
いつか涸れたる。 かなしさよ。  
いざ、その竿を。

太郎。  
乙姫。

あ、これまをし。

ちとせかはらぬ ちぎりぞと

いひしはむかし、 いまはただ

じばしのわかれを をしませて。(太郎留る。)

おお。おもひよりたる ことこそあれ。

この不老のゐに いくちとせ

うきじづみせし この鏡の(釣瓶を取る。)

覆せば返らぬ みづにかへ、(水を傾く。口女に。)

あの涙の玉と 鏡をこれへ、(口女二重に上り二品を取り

渡す。)

なみだとともに(珠を釣瓶に入る。)

心をこめ(息を嘘き込む。)

しつらひなせる たまくしげ、(鏡を蓋に掩ふ。)

これをわが兄に まるらせん。(錦に包む。夫の方へ向く。)

またあふことの あらんまで

このはこをゆめ あけたまふな。

せめては可憐 小汀まで

きみを見おくり まるらせてん。

口女はくしげを(匣を渡す。)

赤女はこの おん釣竿を 持て。

赤女。

はい。(乙姫立つ。赤女口女それぞ



れ物を持ち後に續く。太郎下手へ往きかかる。道具幕。

下ノ巻

第四節

あかつきか 曉近き朧夜。中央より上手へ海の書割。沖合に丹塗の大舟數艘。隊幢小幡を立つ。上手のはづれに龜甲の紋付の幕。下手奥松林。熊手四五本松に寄せ掛けあり。松林の下手はづれに端舟見ゆ。燎籠に篝火。後ノ浦島太郎。上卷の太郎と同年位。色黒く逞じき士。牀儿。鱧ノ狹五郎。五十歳位の郎黨。

漁師大勢。太刀弓箭。

後ノ太郎。舟よそほひは。とこのへりとな。

もはやほごなく。のぼる目と

ともに扶桑の地を離れ、

武運もひらく。あさびらき、

名を千載に。かがやかさん。

狹五郎。ちちのみことも。おん身のごと

國をさまれば。すなごりし

あだおこる日は。たちはきて、

田村將軍の。はたしたに

えぞが千島の はてまでも  
武名を馳させ たまひしが、  
そはまだせまき 國內のこと。  
こたびのきみの くはだては  
とほき化外の 地にわたり  
一ヶ國をも 切りしたがへ  
ちちのみことの みいさをにも  
まさるいさをを たてんため。  
さればおいたる 身ながらも  
この筒川の むらびごと

なりはてんかど なげきしに、  
いきがひありて このたびの  
おんともにたつ うれしさよ。

第一ノ漁師。(花道より出づ。狭五郎に。) 警固の地には ただいま

まで

なにの異變も ひはず。

狭五郎。(頷く。後、太郎に。) 警固のものは おきたれど、

ふなでの邪魔に なるべきこと  
もはやあらじと おもはれし。  
われらのゆきて かへらぬにも、

おんごほつおやに ましましし

うらしまぬしの ひそりにて

うせたまひける むかしのごと、

海界とほく 鯉釣

鯛釣りほこり ひをかさね

ゆくへもしれず なりにしかと

いふのみにして、 ことなるまで

世のうたがひは かかるまじ。

第二ノ漁師。(花道より出づ。) ただいま警固の 道筋に

あやしきをここ ちかづくを

ささへごめて ひへごも。

わがいへごとに わがかへるを

邪魔はしすなと ききいれず、

つかつかこれへ まるりひ。

あれあれかここに。(後ノ太郎始め一同花道に向く。)

狭五郎。 なんごやす。

第五節

前の人人。

太郎。

(第三ノ漁師前に立ち月にて支へつつ後すざりに出づ。太郎左に

包をかかへ右に釣竿を持ち、静かに歩み出づ。後より第四ノ漁師太刀を抜き出づ。睨み合ひて花道に留る。

第三ノ漁師。おしてとほらん ものあらば、

いのちをたてと きみのおほせ、

第四ノ漁師。あやしきものと 存するゆる、

第三。いんとすれども 矢もたたず、

第四。きらんとすれど きすつかず、

第三。これまでおして まるりい。(太郎舞臺に進む。)

狭五郎。(立ち向ふ。) しゃ推参なり なにもものぞ。(たちたちとなる。)

後ノ太郎。(立ち向ふ。) 奇怪のくせもの ござんなれ。

そもそもなんぢが よそほひは

われらとともに いさなごり

海のなりはひ するものと

見えはみゆれど、 おぼろなる

よにもかがやく にしきのつつみ

たばさみたるだに あやしきに、

いれどいられず きれどきれぬ

ふしぎを見せて ちかづくは、

めでたきわれらの かしまだちの

さまたげせんと するにやあらん。  
てなみを見せん。 そのけ。

太郎。

おお。

むかしにかはらず いさまじき  
ふるさとびとの ころかな。  
そらにきらめく いなづまの  
赫たるいかり、 おい木に風  
いはほに波の あらそひは、  
いくももとせの ひさしきま  
わすれるたれど、 いまこそは

われもさめたれ。 わがさとに

わがゆくみちの さまたげすな。

後ノ太郎。 なにわが里とは ことをかこや。

この筒川の むらびとの

みしらぬなんぢ そこのかすや。

いざ。

太郎。 いざ。

後ノ太郎。 いざ。(詰め寄る。二人緋れ竿半ばより折

る。)

にしきのつくみ。 じさいあらん。(手を掛く。引き合ふ。

錦ほぐる。匣と鏡と離れ落つ。匣より無量の眞珠こぼれ  
散り、その邊珠を布きたる如くなる。白雲棚引き出つ。  
太郎よろよろと後に倒る。後、太郎後へさがり白雲を見  
上ぐ。太郎竿のをれを杖にし立つ。白髪になり居る。  
皆皆。 やややややや。

後、太郎。(老人と見て敬ふ心持。) つかのまに

かはりしさまの いぶかしさよ。

(太郎左に杖をつき右に鏡を拾ひ上げ顔を見る。) そもそも

おん身は なんびとぞ。

かくいふわれは としひさしく

この墨吉に いさりする

海士の長にて しが、

とほつおやより よよおなじく

浦嶋太郎と なのりひ。

太郎。 なに、浦嶋、 太郎とな。

さらばおんみの とほつおやに

やへのしほちに こぎいりて

かへらぬひとの ありときかすや。

後、太郎。 げにげに。ことし 天長の

二年を距ること 三百年、

大泊瀬幼武おほはつせわかたけ 天皇のすめらみこと

みよしろじめす 二十二年ねん

月つきさやかなる あきのよに

とほつおやなる 浦島うらしまは

ひとり小ぶねを こぎいでしが、

いくひふれども おほぞらに

雲くもなく、海うみに なみなくして

ひともかへらず ふねもかへらず、

たれいふとなく わたつみの

かみのみやるに ゆきぬとて、

けふまでもよの かたりぐさ。

それをおん身みの とひたまふは。

太郎たらう。その浦嶋うらしまこそ このおきな。

おんみはわが裔すえ。ただならぬ

ふなよそほひは なにゆるぞ。

後のちノ太郎たらう。(下したに居ゐる。) わが父ちちなりし 浦嶋うらしまらの

とほきえみしを うちしより、

平安城へいあんじやうの みよさかえ、

みつぎするもの 歸化きくわするもの

ひきもきらねど、 もののふの

こころは歴かず、ひのもとの  
武名をなほも あげんため、

わたつみこえて とほづくにへ

わたらんとこそ おもひひへ。

おお。いさまじや。わたつみの

かみのみやこそ わがいでしも

おなじこころよ。さりながら

おもふは先祖。

後ノ太郎。

子孫にこそあれ。

行ふは

太郎。

たまをば(地を指す。)舟に つみゆきて、

秋毫をだに おかさざる

いくさのたすけに せらるべし。

後ノ太郎。 げに糧こそは こころして

たくはへたれど 金銀の

ことにはうとき わがともがら

そのそなへをば かきたるに、

ねがうてもなき さいはひなり。

ものごも、たまを はきよせて。

齋し



狹五郎。ふねに昇きゆけ。

皆皆。はッははあ。

第一ノ漁師。さいはひなるかな。まつばかく(熊手を取る。)

第二。さこのわらはのすておきし

第三。げにもくまでの

第四。ありけるよ。(皆皆熊手を取る。その他の

漁師幕をはづして玉を受く。幕を取れば向うに日の出。

松林より鴉啼き立つ。)

後ノ太郎。はや日の出。いでうちたたん。(立つ。)

太郎。事業をわかきわがするに

つたへおこなふことをうる、

これもひとつの不老不死。

われはこれよりやまふかく

かたちをかくし、ひとのよの

なりゆくさまを目守りてん。

さらばひとびと。

後ノ太郎。さらばさらば。

相圖の角を吹かしめよ。(端舟の方へ歩み寄る。狹五郎

旗を振る。舞臺裏にて角を吹く。太郎杖に倚り見送る。

幕。)

歌舞伎

來春元旦に發行すべき第三十二號に「玉匣兩浦島自註」を載せたり。

定價金十八錢 郵税一錢

京橋區南鞘町二十三番地 歌舞伎發行所

明治三十五年十二月廿六日印刷  
明治三十五年十二月廿九日出版

定價金十五錢  
郵税金二錢



著者

東京市本郷區駒込千駄木町二十一番地

森林太郎

發行者

東京市京橋區南鞘町二十三番地  
石田鈴治

印刷者

東京市日本橋區兜町二番地  
長谷川正直

印刷所

東京市日本橋區兜町二番地  
東京印刷株式會社

發行所

東京市京橋區南鞘町二十三番地  
歌舞伎發行所

賣捌所

神田區神保町東京堂、本郷區元富士町盛春堂、日本橋區住吉町至誠堂